

『百人一首』 中村素堂先生の仮名散らし書きの魅力 (三)

ひさかたの光のどけき春の日に しづ心なく花の散るらむ

紀<sup>まきの</sup>友<sup>ともりの</sup>則

〈歌意〉

「こんななにのどかな光が差している春の日に、桜はなぜ忙しく散っていくのだろうか。」

〔出典〕『古今集』(春・八四番)

(紀友則)

生年未詳、延熹五(九〇五)年頃か。

『古今和歌集』撰者の一人。

紀貫之の従兄にあたる。

ひさかたの光のどけき春の日に

しづ心なく花の散るらむ

紀友則

書

〈よみ〉

悲<sup>ひ</sup>さ<sup>か</sup>可<sup>た</sup>堂<sup>の</sup>能

ひ可<sup>か</sup>りのとけ<sup>き</sup>支<sup>き</sup> 春の日に

し徒<sup>つ</sup>こころなく花

能<sup>の</sup>ちるら舞<sup>む</sup>

中村素堂先生の書

晝間欽堂先生提供